平安文学輪読会

一条摂政御集注釈

玉上琢弥
清水好子
山本利達
森一郎
片桐洋一
増田繁夫
吉川寿洋

塙書房刊

一条摂政御集注釈

昭和四十二年十一月二十五日　初版印刷
昭和四十二年十一月三十日　初版発行

定価　一二〇〇円

著者　平安文学輪読会
発行者　白石義明
東京都文京区本郷三丁目六―一〇
整版者　西田栄治
東京都千代田区神田三崎町三―八―二

発行所　塙書房
東京都文京区本郷三丁目六―一〇
電話（八一二）五八二一
振替　東京八七八二

斎藤印刷・鈴木製本

落丁本・乱丁本はお取り替えいたします

凡　例

一、本注釈は、伝西行筆「一条摂政御集」を、尚古会のコロタイプ複製により、忠実に活字に翻刻し、口語訳・語釈および補注を付したものである。なお、読解の便をはかって、百二十三章段に分け、かつ、和歌に通し番号を付した。

二、本文は、用字を通行の字体に訂した上、濁点・句読点などを付した他は、集付・傍記などを含めて原則として底本のままに表わしたが、次の諸点については、印刷の都合上、以下のような処置を加えた。

(イ) 補入・見せげち・書き改めなどについては、改めた本文のみをあげ、語釈欄においてこれを注した。

(ロ) 虫損の箇所は、推定によって得た本文をあげ、語釈欄においてこれを説明した。

(ハ) 「ゝ」「〳〵」は、該当する文字をあてたが、その右傍に付した（　）の中に、（ゝ）（〳〵）と注記した。

(ニ) 「んま」「とん」などの「ん」は、その意味に従って、それぞれ「んま」「とも」として表わした。

三、底本の丁数とその表裏を示すために、文中に」を付し、その下欄に「三五ウ」などと注記した。

四、注釈は、口語訳を主とし、口語訳だけではわからない事項についてのみ、語釈欄・補注欄に注した。

五、本注釈は、昭和三十八年十一月から昭和四十年八月まで、玉上琢弥・清水好子・山本利達・森一郎・片桐洋一・増田繁夫・吉川寿洋が輪読したものを、その後各自が分担して原稿を作成、さらにそれを回覧、討論の上、補筆訂正したものである。なお、付録として載せた解題は片桐洋一が、伊尹年譜・伊尹略系は増田繁夫が、和歌各句索引は吉川寿洋がそれぞれ担当した。

六、歌文の引用についての要領は次のごとくである。

(イ)　正続国歌大観にある歌は、その番号を付した。

(ロ)　伊勢物語と新勅撰集は岩波文庫本、後撰集と拾遺集は古典文庫本、古今集と新古今集は古典文学大系本、夫木抄は国書刊行会本により、その他は国歌大観によった。

(ハ)　引用の歌よりも前にある歌の題や作者名によってそれを示す時は、（　　）をつけた。

「（題しらず）　よみ人しらず」は、「題しらず」のみが引用の歌よりも前のものによったものであり、「（題しらず　よみ人しらず）」は、「題しらず」「よみ人しらず」の両方が、引用した歌より前のものによったことを示す。

(ニ)　それぞれの引用本文によりながら、適宜漢字をあて、かなづかいを訂した場合がある。

七、校注の柱には、（　）の中に、その頁に出ている歌の番号を示した。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

目

次

凡例……三

校注

一条摂政御集注釈……五
補注……一五八

付録

解題……一八七
伊尹年譜……二〇〇
和歌各句索引……二〇七

一条摂政御集注釈

校注

付補注

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

一条せふさうの御しふ

一ウ

【一】

おほくらのしさうくらはしのとよかげ、くちをしきげすなれど、わかかりけるとき、女のもとにいひやりけることどもをかきあつめたるなり。おほやけごとさわがしうて、をかしとおもひけることどもありけれど、」わすれなどしてのちにみれば、ことにもあらずぞありける。いひかはしけるほどの人は、とよかげにことならぬ女なりけれど、としつきをへて、かへりごとをせざりければ、まけじとおもひていひける

二オ

1 拾 あはれともいふべき人はおもほえでみのいたづらになりぬべきかな」

二ウ

女からうじてこたみぞ

2 なにごともおもひしらずはあるべきをまたはあはれとたれかいふべき

はやうの人はかうやうにぞあるべき。いまやうのわかい人は、さしもあらで上ずめきてやみなんかし。

大蔵の史生、倉橋豊蔭は、とるにたらぬ下衆であるが、これは若かった時、女のもとに言いやった数々の歌を書き集めたものである。勤めが忙しくて、当時おもしろいと思った数々のこともあったが、忘れなどして、後に見ると、とりたてる程のものでもない。

校　注(一―二)

言いかわしたほどの相手は、豊蔭とちがわぬ身分の女であったのだけれど、長い年月の間度々手紙を出しても返事をしなかったので、負けまいと思って言いやった

あなたに見捨てられている今、私が死んでもあわれといってくれる筈の人は、誰も思い浮べられないで、私は思いこがれながらむなしくなってしまいそうです。

女は、やっとのことで今度は

恋のつらさのあれこれを思い知らなかったらあわれに思うこともありましょうが、今更あわれなどと誰が申しましょう。

昔の人は、こんな具合であった。今風の若い人は、こんなではなくて、上品ぶって通すだろうよ。

○一条せふさう――藤原伊尹のこと。「せふさう」とは摂政。新撰字鏡には「摂」は「正舒葉反入」とある。また、大島本源氏物語、澪標の巻では、摂政が「せふ正」と書かれている。　**○おほくらのしさうくらはしのとよかげ**――二丁の表から一六丁の表までは、伊尹と女の贈答歌をもとにした歌物語で、この部分においては、主人公が、大蔵史生倉橋豊蔭という人物となっている。摂政太政大臣ともなった伊尹の歌が、全く下衆ともいうべき大蔵史生倉橋豊蔭なる架空の人物の仮面のもとに、歌物語として語られているのである。補注㈠参照。　**○のちにみれば**――「み」の部分は、底本はすり切れているようで、一字分見えないので、前後の関係から「み」を入れて読むことにした。　**○とよかげにことならぬ女なりけれど**――後にも述べるように、倉橋豊蔭は、伊勢物語の主人公と対照される点が多い。伊勢物語では、「身はいやしくて、いとになき人を思ひかけたり」というように、自分よりこの上なく身分の高い女に思いをかける話が多いが、それに対し、豊蔭も身分は低いが、女も同等の身分であったと説明することになったのであろう。伊勢物語を下にふまえての語り方である。「いひかはしけるほどの人」からは、次に語る女についての紹介であり、既に豊蔭と「いひかは」す程の関係のあった女との話ということになる。だが、「いひかはしけるほどの人はとよかげにことならぬ女なりけれど」は、豊蔭の関係した何人かの女についての総合的な説明で、「としつきをへて」以下は、そういう女

の中の一人についての話になっているとも考えられる。更に又、一番と二番の歌の贈答にもとづいて「いひかはしける」とのべられたもので、二番の歌が来るまでは、男の方から長年の間たよりをするばかりだったのだとも考えられる。　**○まけじとおもひて**――伊勢物語では、前述のように、主人公が身分ちがいの女に思いをかけて歎くことが多いが、豊蔭の相手は、「とよかげにことならぬ女」であったから、歎いたり、あきらめたりせず、「まけじ」と思ったのである。ここも伊勢物語をふまえての語り方と思われる。　**○あはれともの歌**――この歌は、拾遺集巻十五恋五、九五〇に「ものいひ侍りける女ののちにつれなく侍りてさらにあはず侍りければ　一条摂政」とあり、拾遺抄巻八恋下にも、拾遺集とほとんど同じ詞書でとられている。百人一首で人口に膾炙しているものである。　**○女からうじてこたみぞ**――「としつきをへてかへりごとを」しなかった女が、男の「みのいたづらに」なる程の思いをこめた歎きの歌に、やっと返事をしたのである。　**○なにごともの歌**――わかりにくい歌であるが、「いひかはし」た関係が長年たつうちに「なにごともおもひし」ることになったものと考えられる。そこで男に返事もしなかったのであるが、内容はともかく、返事が来たことは、男にとっては、よりをもどす道が開けたわけである。但し、前述のように、この歌が、女からの最初の返事で、この歌によってはじめて「いひかは」す仲となったとすると、「または」の解釈がつきにくい。　**○はやうの人は……やみなんかし**――「あるべき」の傍書の「ありける」の本文をとることにした。「はやうの人」とは、この物語の書かれた時点において昔の人。主人公の若き時代を賛美し、「いまやうのわかい人」の態度に不足を感ずるというこの情緒構造は、「昔人は、かくいちはやきみやびをなむしける」という伊勢物語初段の発想や、「昔の若人は、さるすける物思ひをなむしける。今の翁、まさにしなむや」という伊勢物語四十段の発想と軌を一にする。しかし、伊勢物語初段の昔人をほめる規準が、「いちはやきみやび」をした点にあったのに対し、こちらは、「上ずめく」態度などを捨てて、どこまでも相手をえようとする熱意と行動が賛美の規準になっている点に相違が認められる。伊勢物語四十段は、召使いという低い身分の女に思いをかけ、男は親に反対され、一旦恋死にをし、のち、親の願によって生きかえるという、伊勢物語の中では、珍らしく男より女の身分が下という話であるが、一旦は恋死にをする程の「すける物思ひ」をしたという点で、「あはれとも」の歌が、恋のために「みのいたづらに」なることをいう点も

思いあわされ、見栄も命も捨てた恋という点で、発想上初段よりも一層この物語に近い。

【二】

みやづかへする人にやありけん、とよかげ、」ものいはむとて、しもにこよひはあれと、いひおきてくら　三オ
すほどに、あめいみじうふりければ、そのことしりたりける人の、うへになめりと、いひければ、とよか
げ
3をやみせぬなみだのあめにあまぐものの(ふ)ぼらばいとど(ふ)わびしかるべし
なさけなしとやおもひけん。

宮仕えする女であったのだろうか、豊蔭が逢おうと思って、「下(しも)に今夜はいろ」と、言いおいて、その日を暮らすうちに、雨がひどく降ったので、女は下におりなかった。そのことを知っていた人が、「上のようよ」と、言ったので、豊蔭はおまえに逢えず、少しもやまぬ涙の雨にうちしおれているが、天雲のようにおまえがうえに上ったならば、一層つらいことだろう。

豊蔭は、女を薄情だと思ったろうか。

○しも——宮仕えする女の私室。**○そのことしりたりける人**——豊蔭と女との約束を知っていた女房で、女と相部屋だったのであろう。**○あめいみじうふりければ**——底本では、「け」の下に不明の字が書かれており、その上に「け」と書いてある。この文は、言葉の上で下の方へ続いて行くところがないので、ここで句点をつける方がよいかもしれないが、言わんとする気持は補っ

て読めるので、読点にした。この女の仕えている主人のところと、女の私室との間は、かなりの距離があり、廊下伝いに行き来することができなかったので、女は雨のために「しも」におりなかったのだろうと一往推測される。あるいは、雨がひどく降ったので、男は来ないだろうと女が思って「しも」におりなかったのだろうとも考えられる。ところが豊蔭は、雨にもめげずにやって来た。そこに男の誠意が汲みとれよう。いみじう降る雨の中を女のもとへやって来た男の誠意を語ったものとして、落窪の少将や、伊勢物語百七段などは、あまりにも有名である。**○をやみせぬの歌**――「あまぐもののぼらば」は、天雲が上空に昇るように、「うへ」に昇ったらの意。「涙の雨」の例としては、後撰集巻十三恋五、九五六「こと女にものいふとききて、もとのめの内侍のふすべ侍りければ　よしふるの朝臣　めも見えず涙の雨のしぐるれば身のぬれぎぬはひるよしもなし」、後撰集巻十九離別羇旅、一三二七「返し　（宗于朝臣のむすめ）　かさとりの山とたのみし君をおきて涙の雨にぬれつつぞゆく」などがある。

【三】

おなじ女に、いかなるをりにか」ありけむ　三ウ

4 新 からごろもそでに人めはつつめどもこぼるるものはなみだなりけり

女かへし

5 つつむべきそでだにきみはありけるをわれはなみだにながれはてにき

としをへて、上ずめきける人のかういへりけるに、いかばかりあはれとおもひけん。これこそ」女はくち　四オ

をしうも、らうたくもありけれ。をんなのおやききて、いとかしこういふとききて、とよかげ、まだしき

さまのふみをかきてやる

撰　校　注(六―七)

6 ひとしれぬみはいそけども(ん)としをへてなどこえがたきあふさかのせき

これを、おやに、このことしれる人のみせければ、おもひなほりて」かへりごとかか(よ)せけれ(り)。はは(よ)、女に

はらへをさへなむせさせける

7 あづまぢにゆきかふ人にあらぬみのいつかはこえんあふさかのせき

心やましなにとしもへたまへ、とかか(し)す。

女、かたはらいたかりけんかし。人のおやのあはれなることよ。

同じ女に、どのような折であったか

人に知られぬように、人目を袖で包みかくしてはいても、包みきれずにこぼれるものは涙である。

女の返し

包むことのできる袖さえがあなたはおありですけれど、私のは涙に流れてしまいました。

長年上品ぶった人が、このようにいったので、どれ程いとしいと思ったことであろう。こんなだからこそ、女というものは、がっかりさせられもするし、かわいくもあるのだ。

女の親が聞いて、とてもきびしくいっていると聞いて、豊蔭は、まだ深い関係でないふりの手紙を書いてやる

人知れずあなたを思って、この身はあせっていますのに、幾年たっても何故逢坂の関を越えて逢うことができぬのでしょう。

この歌を、女の親に、このいきさつを知っている女房が見せたところ、親は機嫌がなおって、返事を書かせるのだった。さらに母親は、女に祓までもさせたのだった。

あずま路を往来する旅人でもないあなたが、いつ逢坂の関を越えたりなさいましょう。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com